『西南アジア研究』No. 54, 2001

職掌からみたカローシュティー文書中のCojhboと漢語の主簿

市川良文

はじめに

1901年，スタインがニヤ遺跡において本格的な調査を行い多数のカローシュティー文書を発見して以来，その後の日中共同調査による調査時に収集された文書まで含めると，現在までに，ニヤ遺跡を中心とした地域からは合計800点余りのカローシュティー文書が将来されている。これらニヤ遺跡を中心とした地域から発見されているカローシュティー文書には，様々な官職名が記載されている。その中でも特に重要な役割を果たしていたと考えられる官職に，Cojhboと呼ばれる官職がある。この官職名は，欧米の研究者によって‘Governor of the province’と訳され，また中国の研究者たちによっては「州長」と訳され，鄯善王国の支配下にあった各オアシスにおいて行政を司る官職であったと理解されている。我が国においてもまた，鄯善王国の地方行政上重要な役割を果たした官職であると理解されている。実際，文書の内容を検討すると，このCojhboという官職にあるものが様々な役割を果たしていたことがうかがえる。カローシュティー文書解読の当初から，Cojhboについてはその外来説が説かれており，かつて榎一雄が指摘し，近年では山本光朗もそれを支持するように，中国の官職名である主簿が借用されたものと考える見方が出てきている。そこで本稿では，カローシュティー文書において，Cojhboと呼ばれる官職にあるものが実際にはどのような役割を果たしていたのかを検討し，それを主簿にあてることが妥当であるのかどうかについて，若干の考察を試みたいと思う。

I　Cojhboをめぐるこれまでの理解

まず，カローシュティー文書にみられるCojhboという官職名についてのこれまでの研究を簡単にまとめてみたい。

すでに述べた通り，カローシュティー文書にはCojhboという官職名を持つ人物が，いろんな形で登場している。このCojhboという言葉が何を意味するのかということについては，カローシュティー文書の文法研究と英訳とを出版したBurrowは，Cojhboを‘the commonest of all the local titles’と理解した。L. Kh. D.: 90は，Cojhboについて，①約40

人の人物がこの Cojhbo という title を持つこと。② 文書中に出てくる位置から判断して，Cojhbo という title が Ogu，Guśura，Kala，Caṃkura といった title に次ぐランクにあったこと。③ その一方で Cojhbo の地位にあった Soṃjaka という人物が Caḍota において強い支配権を持っていたこと。④ Cojhbo という地位にあった人物には司法，行政（徴税など）双方の職掌があったこと。⑤ さらには軍事面にも関係していたこと。⑥ 彼らの地位は Ogu などの地位に比べるとそれほど高位ではないが，王国の行政において最も活動的な役割を担っていたことなどをあげている。また，Cojhbo という言葉自体については，Kroraina の native language が jhb（＝zb）の子音を持たなかったと考えられることより他言語からの借用語と理解し，Konow 1935 : 772 ff が Maralbasi 写本にでる Cazba をカローシュティー文書の Cojhbo に比定していることや，Henning 1936 : 12 がカローシュティー文書の Cojhbo を Av. cazdahvant に由来すると指摘していることなどを紹介している。また，T. Kh. D. : 149 では，Konow 1937 : 234－40 の所説を引用して西北インドの碑文に現れる cobuva-との関係を指摘している。L. Kh. D. : 90 において Burrow が Cojhbo と他の言語との関連について先行研究を引用しながら述べる指摘は，Bailey 1949 : 127 にもみられる。Bailey はその中で，Burrow よりもやや詳しく Konow や Henning の研究成果を引用し，Cojhbo＝Cazba の理解を示しながらも，その遡源については，Cojhbo を Old Iran. ＊χsaθra-pavan- 'satrap' に由来すると考えている[1]。これに対し Thomas 1944 : 53, 58 は，Cojhbo を『漢書』巻 96 上　西域伝　鄯善国条に記載される官職名且渠と同一視し，官職名よりもむしろ身分的地位を意味するものと考えている[2]。Thomas は，木簡 No. 088［Kh. I. I : 34］の用例に *cojhboana kranaya lṕipeyaṣa ca* とあり，木簡 No. 576［Kh. I. II : 213］の用例に *cojhboanāṃ yitaka vuktoṣa ca* とあって Cojhbo が複数形で使用されている一方で，同一人物と思われる人物が木簡 No. 019［Kh. I. I : 7］で *cojhbo kranaya ṣoṭhaṃgha lṕipeyaṣa ca* と記され，木簡 No. 003［Kh. I. I : 1－2］で *cojhbo yitaka toṃga vuktoṣa ca* と登場するなど，別々の称号を帯びていることから，Cojhbo は官職名であると考えるよりもむしろ身分的地位を示す称号であり，高位の官職一般に使用されたものと結論している。しかし一方で，Thomas は Cojhbo が世襲制であったとは考えておらず，1 年ごとに更新される中央からの任官とし，またその他の官名として，Kori や Cuv́alayina などが Cojhbo より先行して文書に記載されることから，これらの官職が地方において特別な地位を保っていたと考えており，Thomas のいう身分的地位を示す称号という理解が，官職名と理解す

1）Bailey はこの他にも Pelliot や Laufer の説にも言及しているが，それは χsaθra-pavan-に関する諸説であり，ここでは直接関係しないと考えられるため深くは触れない。

2）Thomas の Cojhbo＝且渠の比定は言語学的にみても無理があると思われる。また，且渠については，林 1988 : 638 や孟 1995 : 304 など中国の研究者の研究では，文書にみられる Caṃkura という官職があてられている。Caṃkura＝且渠の当否については，検討するだけの準備を持ち合わせないため，しばらく措くことにしたい。

ることとどれほどの違いがあるのかということはThomas自身の中でもはっきりとした区別があるようには思われない。さらにThomasによれば，こういったCojhboの使用は，エンデレ出土のチベット語文書（c.8c.）にみられるrtse-rje 'head chief' に対応しているという。ここでThomasはjo-co，jo-bo，co-joといった用例もあげているが[3]，これについてはBailey 1949：127が指摘している通り，妥当性を欠いていると考えてよいと思われる。このようにThomasの所説は，イラン系言語からの借用とみるBurrowやBaileyなどの理解とは異なって中国の官職名且渠の音写とみるなどいくらか隔たりがあるが，他言語から借用された官職名であるという大筋ではやはり共通した理解であると思われる。

その後，榎一雄は榎1971：357において，鄯善王国の行政制度についてカローシュティー文書からその概略を述べ，その中でCojhboについて，「このほかに文書に最も頻繁に出てくるのは，チョーズボーcozboという，身分とも官職ともとれる名称で，この名称をもった役人が行政・司法・財政のあらゆる部門に関係している。中には王からチャドータの行政の全権を委ねられたソームジャカSoṃjakaのような人もいる（文書二七二）。私はこのチョーズボーは中国の官名主簿に由来するものではないかと考えているが，明らかでない」とし，Cojhbo（＝Cozbo）[4]と主簿との関係を示唆した。ここでは榎はCojhboが「身分とも官職ともとれる名称」としているが，その後の文脈から判断する限り榎がCojhboを官職名と考えていることは明らかである。しかし榎はCojhbo＝主簿とするその具体的な根拠を示していない。だが近年に至って，山本1996：110はCojhbo＝主簿の対応が榎によってなされたと理解し，さらに山本1997：105においては，Cojhbo＝主簿の比定が榎によってなされたとする理解がみられるようになった。またこれら榎の見解や山本の見解とは別に，Cojhboを主簿の音写とみるものがある。Литвинский 1992：96がそれで，Cojhboはインド，イラン語から解釈することはできないとし，Меньшиковの説として，Cojhboは主簿の音写語であるという理解が示されている。その他にも中国の官名が導入されたとみるものとして，Mukherjee 1996：48がある。MukherjeeはCojhboを楼蘭出土漢文文書にみられる「楼蘭主国」の主国にあてている[5]。

以上，Cojhboという言葉をめぐるこれまでの研究を簡単にまとめてみた。これによってみ

3）rtse-rjeは同時代の漢文文書などにみられる節児に比定されている。rtse-rje節児についてはThomas 1951；藤枝1961；山口1980；楊1997などを参照。

4）jh＝zについてはBurrow 1937：112を参照。本来ならばCojhboをCozboに表記しなおすべきであろうが，引用の関係上煩雑になるのでここではCojhboの形のまま引用することにしたい。その他人名なども，その後の研究によってKh. I. I II IIIのtrans.が補正されているが，本稿ではKh. I. I II IIIの表記に従った。

5）楼蘭出土の漢文文書に関しては，厳1963；林1985；長沢1996：163－242；伊藤1999などの研究を参照した。MukherjeeがCojhboに対応すると考えている「楼蘭主国」は，ヘディンが楼蘭で発見し，Conradyが釈読した紙片断片C 1－19－7［Conrady 1920：97；楼蘭1999：204－5］にみられる。しかし，言語学的にみてCojhbo＝主国とみなすことはできないだろう。榎1965：51－4はこの「楼蘭主国」の主国をカローシュティー木簡にみられるrajadharagaに対応するものと考えている。なお「楼蘭主国」については小山1980：827－35；山本1999：34－5なども参照されたい。

ると，Cojhbo という言葉が official title であり，かつ他言語からの借用語とみることは，諸先学の間においてもほぼ共通してみられる理解であるといえる。しかし，その遡源については，先学によって若干の違いが生じている。Burrow や Henning, Konow, Bailey といった研究者においては，Cojhbo という言葉が Av. や old Iran. といったイラン系言語からの借用語と考えられているのに対し，榎以後では具体的な根拠は示されないものの，Cojhbo＝主簿という漢語からの借用と考える研究がみられるようになったのである[6]。このように，これまでの研究では Cojhbo の持つ音価がどの言語からの借用なのかという点に重点が置かれ，その遡源が議論されてきたといってよい。しかし，より具体的に文書にみられる職掌からの検討が加えられるべきであろう。では，実際にカローシュティー文書においては，Cojhbo は具体的にどのような職掌を担っていたのであろうか。以下においては，カローシュティー文書にみられる事例を具体的に検証しながら，Cojhbo という官職が果たした役割について検討を加え，Cojhbo＝主簿と考えることが妥当であるのか否かを探っていきたい。

II　文書の年代からみた Cojhbo と主簿

さて，本節以降においては，カローシュティー木簡にみられる Cojhbo の具体例を通してその実態について検討を加えるが，その前に，1 つ確認しておきたいことがある。それはカローシュティー文書の絶対年代についてである。カローシュティー文書の絶対年代については，すでに Stein 1907: 370－1 が指摘している通り，スタインの第 1 次中央アジア探検時の発掘調査において，ニヤ遺跡 N 5－15 遺構から多くのカローシュティー木簡とともに泰始五年（269）の紀年を持つ漢文木簡が発見され，その当初から 269 年を含む年代が想定されていた[7]。その後 Brough 1965: 600－5 は，スタインによって将来されたカローシュティー木簡中 76 点の紀年を持つ木簡のうち，Aṃgoka 王の 17 年に初出する王の称号 Jiṭuṃgha を中国の侍中が音写されたものと考え，『晋書』巻 3 武帝紀の記載によって侍中の称号が鄯善王国に導入された年代を算定し，Aṃgoka の 17 年を 263 年とした。また Brough 1966: 169 は鄯善王国の歴史を 3 つの時期に区分し，第 1 期をクシャーン朝支配期，第 2 期を独立期，第 3 期が中国の宗主権を認めた時期と考えている。その後 榎 1967: 12－5 は『初学記』の記載から Brough 説に若干の補訂を加え Aṃgoka の 17 年を 283 年とした。さらに 長沢 1976: 97－102 は晋の西域経営は魏のそれを引き継いだものとして Aṃgoka の 17 年を 228 年に比定す

6）ただし，これらの研究とは異なり，中国の研究者たちは Cojhbo に対して慎重である。林 1988 や孟 1995 などをはじめとする中国の研究者たちによる一連の研究では，先述の通り Cojhbo は州長と訳されているが，それがイラン系言語からの借用であるか漢語からの借用であるのかについては沈黙している。

7）ただし，後述する Brough の研究以前には，カローシュティー木簡の年代について 3 世紀とみるもの，5 世紀とみるもの，7 世紀とみるものがあった［Thomas 1934; 榎 1965］。

るにいたっている[8)]。このように Aṃgoka の 17 年を何年と考えるかについては先学によって若干の違いはあるが，Aṃgoka の 17 年を絶対年代化することでカローシュティー文書の絶対年代は算出されてきたといってよい。しかし，近年日中共同ニヤ遺跡調査によって収集され，報告書 I　1996: 312－3 にトランスクリプトされたカローシュティー文書の中に，Aṃgoka の 8 年と読みうる紀年を持つ矩形木簡に Jiṭuṃgha という称号が使用されているものがあり，この例から侍中の称号が導入された年次については訂正しなければならない可能性が出てきたのである。このカローシュティー木簡 91 NA 19 は文字の残り具合が不鮮明かつ断片的であり，Aṃgoka は読みようによっては Vaṣmana の可能性もあり，実際，林 1999: 264 は Aṃgoka ではなく Vaṣmana と読んでいる。この木簡には Pǵiya という人物と Camaka という人物が登場するが，この二人と同名の人物が登場し，なおかつ紀年を有しているカローシュティー木簡には，タクティ形木簡 No. 204 [Kh. I. I : 79－80] と矩形木簡 No. 678 [Kh. I. II : 255] がある。木簡 No. 204 は Vaṣmana の 7 年の紀年を持ち，木簡 No. 678 は王名，紀年がともに不明であるものの Rapson によって Vaṣmana の 6 年に比定されている [Kh. I. III : 328]。確かにこれら木簡 No. 204 と木簡 No. 678 に登場する Pǵiya 及び Camaka が，91 NA 19 木簡に登場する Pǵiya, Camaka と同一人物であるとはにわかに判断はできないが，これまでの木簡の例で考えると Jiṭuṃgha の称号が Aṃgoka の 17 年以前に使用されているものはないし，同一人物である可能性は高く，今のところ木簡91 NA 19は林が指摘したように「Aṃgoka の 8 年」ではなく「Vaṣmana の 8 年」の紀年を持つと考えておく方が良いように思われる。

以上のように，カローシュティー文書の年代は，先学の研究によって 3 世紀から 4 世紀にかけての時期に求めることができ，楼蘭及びニヤ遺跡から出土した漢文木簡の年代とほぼ重なると考えられる。その年代の重なるカローシュティー文書と漢文文書の中に，官職名としてそれぞれ Cojhbo と主簿が登場するのである。例えば，Kh. I. II : 253 所載の L.A. II.ii 出土楔形木簡 No. 671 があげられるが，内容は次の通りである。

[Obv.]

——— [ṣo] tu te valaǵa trina saṃvatsari pačavara giṃnidavo

……これら保護者は 3 年分の供給を受けるべきである。

[Rev.]

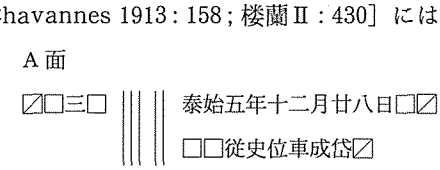
tu[ǵ.] ——— r[o] cojhbo rutraya kitsaitsaṃna cauleya siǵnayaṣa ca dadavo

……Cojhbo 官 Rutraya, Kitsaitsa 官たち Cauleya, Siǵnaya に与えるべし。

8）ただし長沢はその後補訂を加えている [長沢 1996 : 323－42]。なお長沢 1996 : 307 は Rapson の整理した紀年文書の枚数を 77 枚としているが，紀年文書のうち No. 582 は Aṃgoka 20 年と Mahiri 4 年の 2 つの紀年を持っている文書であるから，枚数でいうと 76 枚が正しい。また，Rapson らがまとめた資料集 Kh. I. I II III の出版後，新たに Burrow 1937 によって増補された木簡のうちに 4 枚 (No. 767, No. 770, No. 777, No. 782)，日中共同ニヤ遺跡調査隊収集木簡 [報告書 I II] に 4 枚 (91 NA 19, 91 NS 9 , 93 A 27 F 3 : 7 , 95 No.3a)，龍谷大学図書館蔵木簡 [蓮池・市川 1998] に 1 枚 (No. 11104) 紀年文書があるから，都合 85 枚の紀年文書があることになる。

ここにはCojhbo官としてRutrayaという人名が記され，王の命令書文書に特徴的な“……dadavo”という表現が用いられている[9]。また，一方で楼蘭出土の漢文木簡CH 733［Chavannes 1913：158；楼蘭Ⅱ：430］には，

A面



B面

☑主簿梁鸞☑

とあり，泰始5年の紀年を持つ木簡に主簿梁鸞という人物が記されている。このようにカローシュティー文書と同じ時期に属すると考えられる楼蘭出土の漢文木簡には，主簿という官職名を持つ人物が登場する木簡が約20点存在しており，カローシュティー文書に現れるCojhboと漢文木簡の主簿との間に何らかの関連を想定することは可能なのである。

ところで，前述したように，Maralbasi出土の一連のトゥムシュク・サカ語文書には，Cazbaという単語が登場する。これらの文書はTⅣM 162（1）－（6）とナンバリングされた世俗文書で，7世紀から8世紀にかけての時期のものと考えられる[10]。すでにKonow 1935：816でも指摘されているように，これらの文書に使用されるCazbaはその音価や使用例からみてCojhboと同一の遡源を持つと考えられる。しかし，Maralbasi出土文書とカローシュティー文書の年代には，少なく見積もっても300年ほどの開きがあり，かつCazbaという単語が持つ性格なども明らかではない。またトゥムシュク・サカ語文書にはCāṃṣi長史という漢語からの借用語もみられるなど，Cojhbo＝Cazbaとみなすには問題も残ると思われる[11]。

Ⅲ　漢文史料にみえる主簿の職掌

上述の通り，楼蘭から出土するカローシュティー文書にはCojhbo官という官職名が，同

9）一連のカローシュティー文書は，その内容から①王の命令書文書（dadavo文書），②証文文書（dharidavo文書），③公務文書（vyalidavo文書），④リスト，⑤その他の5つに大別できる。これらの文書の特長については蓮池 1999：284－91に詳しいので参照されたい。

10）これらの文書のうち，TⅣM 162（1），TⅣM 162（2），TⅣM 162（4），TⅣM 162（5）の各文書にWasudewaという王名がみられることから，クシャーン朝との関係が示されたこともあった（例えばKonow 1935：775）。しかし，これらの文書に「長史」の音写語と考えられるCāṃṣiが使用されていることなどから，Konow 1947はこれらの文書が唐代期のものであるとした。また榮 1991はこれらの文書にみられるgyazdi-を『新唐書』巻四十三下やその他のトルファン出土唐代文書などにみられる「據史徳」の音写と考え，文書に漢字の署名やCāṃṣi（長史）がみられ，画指が示されていることなどから，文書の年代を658年以後としている。

11）Cāṃṣiが長史の音写語であることは，コータン・サカ語の例［高田 1988：78］からみてもまず間違いないと考えられる。しかしその場合，CāṃṣiとCazbaの関係，CazbaとCojhboとの関係が問題となるように思われる。

じく漢文文書には主簿という官職名が記されるのであるが，両文書群が同じ時期に属し，同じ地域で使用されていたと考えられる以上，Cojhbo が主簿の借用語と考えられるならば，そこには官職の担うべき役割について共通した理解が存在していたはずである。そこで，本節ではまず漢文資料中にみられる主簿について検討してみたい。

すでに引用したように，楼蘭出土の漢文文書には主簿の任にあった人物たちが登場する文書がある。さきに引用した漢文木簡以外にも，主簿がみられる文書としては次のようなものがあげられる。

CH 886［Chavannes 1913 : 182－3 ; 楼蘭 I : 61－2］

A 面

建興十八年三月十七日粟[特]胡楼□⧄

一萬石銭二百

B 面

功曹　　主簿⧄

C 1－13－1［Conrady 1920 : 90－1 ; 楼蘭 I : 174－5］

A 面

三月廿三日郡内具⧄

大人坐前前者⧄

後信希白問疏⧄

西有人到雖不獲吉⧄

以用欽喜〃即日郡⧄

B 面

白泰文

主簿馬君

C 1－13－2［Conrady 1920 : 90－3 ; 楼蘭 I : 176－7］

A 面

虵牀子二匹買□

若有不得□□□□

次以□□若不得者

綾□買絮若綾絮

□買之

并蛇牀子　馬主簿念事

B 面

□□以去十一月[中]?

王故□不濟□

高旋内□[槍齒]?

遠不過来秋?□

之事故不多□

麦一倉卒不多

CH 922［Chavannes 1913 : 190 ; 楼蘭Ⅱ : 396－7］

張主簿前

八月廿八日楼蘭白疏惲惶恐白奉辞

⧄□□無𨻰?親省寫心東望

ただし，これら楼蘭出土の漢文文書は内容が断片的で，残念ながらこれらの文書から具体的な主簿の職掌をうかがうことは難しい。

主簿は漢代以後中央及び地方に置かれた官職であり，文書，簿籍の管理などの職掌を担い，掾史にあってはトップクラスの地位にあった。『晋書』巻24職官志[12]によれば，

> 縣の大なるは令を置き，小なるは長を置く。主簿，錄事史，主記室史，門下書佐，幹，游徼，議生，循行功曹史，小史，廷掾，功曹史，小史書佐幹，戸曹掾史幹，法曹門幹，金倉賊曹掾史，兵曹史，吏曹史，獄小史，獄門亭長，都亭長，賊捕掾等の員有り。

とあり，また『通典』巻33　職官15[13]によれば，

> 漢の縣に丞，尉及び諸々の曹掾有り。……晉の縣に主簿，功曹，廷掾，法曹，金，倉，賊曹掾，兵曹，賊捕掾等の員有り。……主簿は漢に之れ有り。晉亦た之れ有り。他の史は多く闕す。大唐赤縣に二人置き，他は縣に各々一人，付事句稽を掌り，鈔目を省署し，縣内の非違を糾正し，印を監し，紙筆を給す。

とあるから，これら楼蘭出土の漢文文書に現れる主簿もまた，当地でも漢文史料にみられるような文書の整理等の職掌を担っていたと考えられる。

Ⅳ　カローシュティー文書にみえるCojhboの職掌

上述の通り，楼蘭から出土する漢文文書には主簿という官職が登場し，当地において文書の整理等の職掌を担っていたと思われるが，一方のカローシュティー文書に登場するCojhboはどのような職掌を担っていたのであろうか。本節ではCojhbo官の登場するカローシュティー文書を取り上げ，両者に共通性があるのかどうか，検討を試みたい。

---

12)『晋書』巻24職官志の原文は以下の通り。
縣大者置令，小者置長。有主簿，錄事史，主記室史，門下書佐，幹，游徼，議生，循行功曹史，小史，廷掾，功曹史，小史書佐幹，戸曹掾史幹，法曹門幹，金倉賊曹掾史，兵曹史，吏曹史，獄小史，獄門亭長，都亭長，賊捕掾等員。

13)『通典』巻33　職官15の原文は以下の通り。
漢縣有丞，尉及諸曹掾。……晉縣有主簿，功曹，廷掾，法曹，金，倉，賊曹掾，兵曹，賊捕掾等員。……主簿漢有之。晉亦有之。他史多闕。大唐赤縣置二人，他縣各一人，掌付事句稽，省署鈔目，糾正縣内非違，監印，給紙筆。

前述した先学の研究にもみられる通り，Cojhbo 官は鄯善王国の各地に配され，地方長官の役割を担った官職であったと考えられる。現存のカローシュティー文書においては，Cojhbo の記載がある文書は，管見の限りでは総数で 350 点を数えることができる[14]。それらの文書には，60 名ほどの人物が Cojhbo 官の称号を持って登場している[15]。これらの人

14）これらの木簡 No. を示すと以下の通りになる。なおスタイン収集木簡については Kh. I. I II III 及び Burrow 1937 の番号を，日中共同ニヤ遺跡調査隊収集木簡は報告書 I II の番号を，龍谷大学図書館蔵の木簡は蓮池・市川 1998 の番号を用いている。

まず，スタイン収集木簡は，001, 003, 006, 007, 009, 010, 011, 013, 014, 015, 016, 017, 018, 019, 020, 022, 023, 024, 026, 027, 028, 029, 030, 031, 033, 035, 036, 037, 039, 040, 042, 044, 045, 046, 047, 049, 050, 051, 052, 053, 055, 056, 057, 058, 061, 062, 063, 064, 068, 070, 071, 072, 085, 086, 088, 097, 099, 100, 103, 104, 107, 113, 114, 115, 118, 119, 120, 124, 126, 127, 130, 133, 134, 136, 138, 139, 142, 144, 145, 147, 150, 152, 153, 155, 156, 157, 158, 159, 160, 161, 162, 164, 165, 189, 192, 193, 194, 198, 203, 212, 213, 214, 216, 217, 219, 222, 223, 226, 228, 229, 233, 235, 236, 243, 244, 246, 248, 253, 259, 261, 262, 263, 265, 266, 267, 270, 271, 272, 273, 275, 276, 279, 280, 281, 284, 286, 288, 289, 291, 292, 293, 295, 296, 297, 305, 307, 308, 309, 310, 311, 312, 314, 315, 317, 318, 320, 322, 325, 326, 327, 329, 330, 332, 336, 338, 339, 340, 341, 343, 344, 345, 347, 348, 349, 350, 351, 352, 355, 356, 357, 358, 359, 360, 362, 364, 366, 367, 368, 370, 371, 373, 374, 375, 378, 381, 384, 385, 386, 388, 389, 390, 391, 392, 393, 394, 396, 397, 399, 400, 401, 403, 407, 408, 412, 413, 415, 417, 421, 427, 430, 433, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 451, 461, 468, 471, 470, 473, 477, 478, 479, 480, 481, 482, 490, 491, 492, 493, 494, 497, 498, 502, 503, 504, 506, 507, 509, 515, 516, 517, 518, 520, 521, 524, 526, 527, 528, 530, 532, 537, 538, 540, 541, 542, 545, 547, 550, 551, 554, 553, 556, 559, 561, 562, 564, 566, 567, 568, 569, 570, 571, 573, 575, 576, 577, 578, 579, 581, 582, 584, 585, 591, 592, 593, 599, 621, 625, 626, 629, 630, 632, 636, 637, 638, 641, 644, 657, 671, 683, 706, 709, 711, 713, 714, 720, 723, 724, 725, 729, 732, 733, 734, 735, 736, 738, 743, 744, 745, 750, 751, 759, 764, 765, 767, 769, 771 の各木簡。

日中共同ニヤ遺跡調査隊収集木簡は，91 NT 22, 91 NA 14, 91 NA 18, 91 NA 20, 91 NK2, 92 MNB3, 93 N 3 xB, 95 No. 142, 95 No. 161 の各木簡。

龍谷大学図書館蔵の木簡は No. 11103。

これらのそれぞれに Cojhbo 官が登場する。中には Cojhbo 官が複数記されるものもある。

15）Cojhbo 官として登場する人物たちとしては，管見の限りでは以下の人物たちが知られる。（　）内は木簡 No. を指す。これらの人物たちのうち，例えば Naṃtipala と Naṃdipala は明らかに同一人物のヴァリアント表記と思われ，その他にもヴァリアントと考えられる表記があるから，60 名ほどが Cojhbo 官として活躍していたことになろう。なお木簡 No. は，明らかに Cojhbo と記されるもののみをあげ，同じ人物と思われるものの他の官職を冠せられ記されるものについては，ここでは割愛している。

Alṕaya (709), Opǵeya (332), Iṃdrasena (318), Kaṃci (561), Kaṃciya (592), Kapǵeya (437, 706), Kirtiśaṁa (318), Kunala (022, 040, 064, 107, 119, 203, 515), Kuv́iñeya (571), Kolṕisa (107, 130, 214, 360, 392, 575, 625, 626), Kranaya (019, 022, 071, 088, 114, 119, 126, 134, 155, 162, 165, 192, 243, 265, 340, 344, 400, 403, 413, 417, 430, 435, 438, 439, 461, 494, 497, 498, 502, 503, 504, 515, 554, 636, 638, 641, 723, 734, 744, 745, 767, 771), Ṅgaca (086, 127), Cakvala (575), Catarogae (399), Calma (532), Cinyasa (399), Cimola (297, 92 MNB 3), Jayatrada (578), Jivaśama (506, 709 (?)), Takra (318, 714), Taǵira (713, 93 N 3 xB), Taṃjaka (001, 007, 015, 024, 026, 055, 097, 130, 139, 159, 367, 527, 541, 566, 575, 625, 724), Tsmaǵa (055), Tsimaya (769), Tsmaya (142, 156, 157, 158, 433), Daḑavala (709), Dhamaṣena (381), Dhaṁena (593), Naṃtaṣena (399), Naṃtipala (478), Naṃdipala (320, 95 No. 161), Namarajhma (103, 120, 133), Namarasma (576), Nastiṃta (152), Patraya (126, 162, 492, 494), Paltuǵeṣa (683), Pite (332), Piteya (062, 259, 378, 91 NK 2), Pgoa (593), Biṃmaṣena (570), Biṃbhaṣena (578), Budharačhiya (288), Bhaǵaṣenaṣa (253), Bhimaya (014, 035, 070, 509, 521, 657), Bhimaṣena (317, 550), Mitrapala (318), Yitaka (003, 011, 023, 028, 037, 042, 044, 045, 049, 115, 124, 138, 189, 216, 226, 236, 266, 322 (?), 350, 375, 399, 421, 427, 451, 468, 470, 481, 516, 524, 540, 561, 576, 720, 729, 746 (?)), Yili (062, 288), Rataspa (040, 064), Raṃñsoṣa (421), Rutraya (671), Rapaya (492), Larsu (343, 345, 401), Lustu (327, 579), Lṕipeya (086, 088, 099, 104, 113, 118, 119, 126, 127, 130, 133, 136, 139, 145, 150, 153, 160, 161, 164, 194, 430, 490, 517, 554, 750), Lṕipe (193, 198, 435, 438, 477, 515), Lṕimsu (072, 085, 100, 147, No. 11103), Vanaṃtaṣa (582), Vukto (322, 407, 576), Vuǵaca↗

物たちのうち，Kranaya, Taṃjaka, Yitaka, Lṕipeya, Śamaṣena, Soṃjaka の6名が登場する例が特に多く，293点にものぼる。またこれらの人物たちに冠される Cojhbo には，さらに mahaṃta-, maha-という称号が付される場合もあり，mahaṃta- / maha- Cojhbo と称されるのは上記の6名のみである。この事実から，[Atwood 1991 : 195] は Cojhbo には3種の意味合いがあったとする[16]。しかし，これら mahaṃta-/maha-の冠される文書は証文文書などに限られた用法であり，また Guśura 官の職にあったものにも付されている例もある（No. 696 [Kh. I. II : 261]，No. 703 [Kh. I. II : 264－5]）ため，敬称として用いられたと考えるべきであると思われる[17]。

さて上記350点の木簡の中には，内容的に大別して① 王の命令書文書，② 証文文書，③ 公務文書，④ リスト，⑤ その他，の各種文書が含まれている[18]。これらのうち Cojhbo の担っ

↘ (644), Varpa (581), Viryavaṃda (055), Śamaṣena (006, 016, 039, 047, 049, 068, 124, 213, 223, 226, 228, 236, 243, 284, 291, 308, 315, 325, 326, 330, 347, 348, 362, 378 (?), 384, 390, 397, 399, 436, 482, 493, 518, 528, 537, 538, 547, 550, 556, 577, 593, 759, 765, 91 NT 22, 91 NA 14, 91 NA 18, 91 NA 20, 95 No. 142), Sameka (040, 064), Simolǵa (055), Suryamitra (295, 582), Soṃjaka (009, 010, 013, 017, 018, 020, 027, 029, 030, 031, 033, 036, 046, 050, 051, 052, 053, 056, 057, 058, 061, 063, 144, 212, 214, 217, 219, 222, 229, 233, 235, 244, 246, 248, 253, 259, 261, 262, 263, 267, 270, 271, 272, 273, 275, 276, 279, 280, 281, 286, 288, 289, 292, 293, 296, 297, 305, 307, 309, 310, 311, 312, 314, 317, 329, 336, 338, 339, 341, 349, 351, 352, 355, 356, 357, 358, 359, 360, 364, 366, 367, 368, 370, 371, 373, 374, 381, 385, 386, 388, 389, 391, 392, 393, 394 b, 396, 408, 412, 415, 434, 471, 473, 479, 480, 491, 507, 520, 526, 530, 538, 542, 545, 551, 553, 559, 562, 564, 567, 568, 569, 573, 578, 582, 584, 585, 599, 621, 629, 630, 632, 637, 711, 725, 732, 733, 735, 736, 738, 743, 750, 751, 764), Soṃdara (532), Smati (732).
なお，本文中に引用したカローシュティー文書の私訳にあたっては Burrow の英訳 [T. Kh. D.] を参照した。本稿 Appendix.2も参照されたい。

16) Atwood 1991 : 195 は，

> the term *cojhbo* is trivalent. It can refer to the governor of a province = *mahaṃta cojhbo,* or a specific subordinate officer, or be used in a very vague sense meaning essentially official.

とし，mahaṃta- / maha-のつく場合とつかない場合に，その性格が異なると考えている。

17) Cojhbo 官に mahaṃta- / maha-の尊称が付されている文書は，管見の限りでは，No. 161 mahaṃtacojhbo lṕipeya, No. 162 mahaṃtacojhbo kranaya ṣoṭhaṃgha lṕipeya, No. 259 mahacojhbo soṃjaka, No. 288 mahacojhbo soṃjaka, No. 307 mahacojhbo soṃjaka, No. 385 mahaṃtacojhbo soṃjaka, No. 390 mahaṃtacojhbo śamaṣena, No. 399 mahacojhbo yitaka, No. 541 mahaṃtacojhbo taṃjaka, No. 585 mahacojhbo soṃjaga, mahatacojhbo soṃjaka があげられる。しかしこれらの文書はすべて証文（vyalidavo）文書もしくはその類型に分類できるものであり [蓮池 1999 : 288－9]，いわゆる王の命令書（dadavo）文書 [蓮池 1999 : 284－7] には mahaṃta- / maha-が付された Cojhbo 官はみられない。このことは，mahaṃta-もしくは maha-が冠されるものと冠されないものに，Cojhbo 官の官職としての性格に違いがなかったことを示すと考えられる。Guśura 官の例（No. 696, No. 703）についてもまた，ともに王の命令書文書ではなく，その内容からみて vyalidavo 文書に分類されるものと考えられる。

18) いまそれらの文書数を示すと以下の通りとなる。① 王の命令書文書 225点 ② 証文文書 34点 ③ 公務文書 57点 ④ リスト 11点 ⑤ その他 23点。これらの分類は，①には dadavo（与えるべし）及びそのヴァリアント /mahanuava maharaya lihati ...maṃtra deti（偉大なる大王記す。……に命令を与える）のいずれかの記載があるもの ②には dharidavo（保管すべし）及びそのヴァリアントが記されるもの ③には vyalidavo（紐を解くべし）及びそのヴァリアント / priya devamamnuśa ... arogi preśeti（天人に勝れた……に健康をお贈りします）及びその類型 /... padamulaṃmi（……の足下に）のいずれかの表現がみられるもの ⑤には判断するべき要素がみられないものという規準で行っている。上記の特長がみいだせない文書⑤には，いわゆる紀年文書も含まれるが，それらの文書は②に分類できる可能性が高い。その理由は，上記の特長のうち dharidavo 及びそのヴァリアントのみが紀年文書にもみられる特長（例えば No. 318）だからである。それらの文書を②に分類すれば，②は51点，⑤は6点となる。

た職掌の性格を具体的に示すと考えられるのは，① 王の命令書文書と③ 公務文書である。また，これまでに発見収集されているカローシュティー文書 800 点余りのうち，王の命令書文書に分類しうるものは全部で 252 点存在する。これらのうち Cojhbo 官に宛てられていることがはっきり確認できるものは 202 点にのぼり，王の命令書文書全体の 80% を占めている[19]。これら Cojhbo 官に宛てられた王の命令書は Cojhbo 官自身に対しての命令書簡と認められるものが多数を占めるが，また Cojhbo 官を介在して他の官職の地位にあった者などに命令が下されている場合もある。このことは Cojhbo 官が地方官として重要な位置にいたということの反証であるとも考えられよう。このように，王の命令書文書は Cojhbo 官が実際に担っていた職掌をよく示していると考えられる。そこで，これらの文書のうちここでは王の命令書文書を中心に幾つか取り上げ，Cojhbo の担っていた職掌の性格を探っていくことにしたい。

まず木簡 No. 028（[Kh. I. I：10]）の例をあげておこう。木簡 No. 028 は N 1 出土の楔形木簡で，Cojhbo 官 Yitaka と Toṃga 官 Vukto とに宛てられた王の命令書文書である。

[Obv.]

（1）mahanuava maharaya lihati　cojhbo yitaka toṃga vuktoṣa ca matra

偉大なる大王記す。　Cojhbo 官 Yitaka と Toṃga 官 Vukto に命令を

（2）deti ṣaca yahi eda kilamudra atra eśati praṭha atra kala purnabala ni kulola kulbhu nama yo ca–

与える。さて，この封泥された楔形文書がそちらに届いたなら，ただちにそちらで kala 官 Purnabala の Kulbhu という名の kulola（?）が，

（3）vala leharaǵa iśa gamiṣati tasa hastami iśa viṣajidavo

ただちに Leharaǵa などの手によってこちらに送られねばならない。

[Rev.]

kalaṣa

Kala 官

ここでは Cojhbo 官と Toṃga 官に命令が与えられているが，命令の内容は Leharaǵa への間接的な命令ということができよう。こういった例は，例えば楔形木簡 No. 022 [Kh. I. I：8] にもみられる。

[Obv.]

19）王の命令書文書のうち，Cojhbo 官以外に宛てられたことがはっきりしている文書は，わずかに 35 点しかない。それらは，Kala, Kitsaitsa, Kori, Ṣoṭaṃgha, Tasuca, Cuv́alayina といった官職にあった人物たちに宛てられている。また，注 18）に記したように，mahanuava maharaya lihati という表現は王の命令書文書に特徴的な表現といえるのだが，... lihati という表現は非常に限られた表現であったらしく，mahanuava maharaya 以外の主語でこの表現を用いている文書は 7 例しかない。さらに maharaya 以外のはっきりとした主語を持つ文書で maṃtra deti という表現が使用されているものに至ってはわずか 3 例のみである。

(1) mahanuava maharaya lihati cojhboana kranaya kunala ṣoṭhaṃgha lṕipeyaṣa ca maṃtra

偉大なる大王記す。 Cojhbo 官たち Kranaya と Kunala, Ṣoṭhaṃgha 官 Lṕipeya に命令を

(2) deti ṣaca ahono imade lṕimsu – – duta suv́arnapa[la]ṣa ca dutiyae khotaṃnaṃmi gaṃdavo arivaǵa rutrayaṣa sveyam eva gaṃdavya lṕimsuaṣa uṭa 2 edeṣa

与える。さて，今ここから Lṕimsu が……そして Suv́arnapala が使節として Khotan に行かねばならない。Arivaǵa の Rutraya が自身で行かねばならない。Lṕimsua は 2 頭

(3) suv́arna[pala] rutrayaṣa ca – – – – – – na gaṃdavya ma iṃci vithana kartavo yatha purviǵa dutana rajade saṃmana pačevari ciṃdidaǧa tena vidhanena ahono ede

のラクダを所有している。これら Suv́arnapala と Rutraya は……行く必要がない[20]。如何なる延期もなされるべきでない。以前，使節のために王から名誉［ある贈り物］と食糧がこの延期によって算定されたように，今や……

(4) (indistinct trace)

[Rev.]

lṕimsu

Lṕimsu

この文書は Khotan への使節に関する王の命令書文書と思われるが，やはりここでも Cojhbo 官たちに使節派遣を促す役割が課せられていると考えられる。

つぎに木簡 No. 564［Kh. I. II : 207］の例をみることにする。これは N 24 出土の楔形木簡で，Soṃjaka に宛てられた王の命令書文書である。

[Cov. –tablet, Obv.]

cojhbo soṃjakaṣa dadavo

Cojhbo 官 Soṃjaka に与えるべし。

[Under–tablet, Obv.]

(1) mahanuava maharaya lihati cojhbo soṃjakaṣa maṃtra deti ṣa ca

偉大なる大王記す。 Cojhbo 官 Soṃjaka に命令を与える。さて，

(2) ahuno iśa kuñita viṃñaveti yatha etaṣa unidaǵa putra giḍae huati śraṃmaṃna śrṛpaṃmena vikrida ari śaraspaṣa vaṃti yahi eda kilamuṃtra atra eśati

今ここに，Kuñita がかく申し立てている。彼に養子に出された息子がいる。沙門 Śrṛpaṃma によって Ari 官（?）Śaraspa に売られたと。この封泥された楔形文書がそちらに届いたなら，

---

20) T. Kh. D.: 5 は，前後の文脈から，

These (people), Rutraya and Suv́arnapala [.... must go, Lyimsu need (?)] not go.

と補訳している。

（3）praṭha anada pruchidavo yadi bhudartha eva hačňadi taha na dhaṁa unidaǵa putra aṃnyeṣa vikrinidavo yatha dhaṁena ničeya kartavo

ただちに注意深く調査すべきである。それが本当である場合，養子に出された息子が売られるべきという法はない。法の如く，決定は下されるべきである。

[Under-tablet, Rev]

kuñitaṣa

Kuñita に。

ここでは，Cojhbo 官 Soṃjaka は，Kuñita が提訴した案件についての調査を命じられ，法に基づいて処理するよう命じられている。これによって Cojhbo 官が司法に関わる職掌を持っていたことがわかる。Kuñita は公務文書である木簡 No. 569［Kh. I. II：209］にも登場する。そこでは Cojhbo 官 Soṃjaka は Kuñita が得た養子に関する調査，判決を行っている。

同じ Cojhbo 官 Soṃjaka 宛の文書には，さらにさまざまな職掌を担っていたことをうかがわせるものがある。皮革文書 No. 272［Kh. I. I：102］は N 5－15 遺構出土の王の命令書文書で，そこでは Cojhbo 官 Soṃjaka に多くの命令が下されている。

[Obv.]

（1）mahanuava maharaya [lihati]　cojhbo soṃjakaṣa maṃtra deti evaṃ ca janaṃda bhavidavya

偉大なる大王［記す］。Cojhbo 官 Soṃjaka に命令を与える。［そなたは］知らねばならない。

（2）yo likhami ṣaca yahi anati didemi rajakicaṣa kridena taha rajakaryaṃmi ratradivaṣa osuka avajidavya avi sṕasa jivita paricaǵena anada rač̌hidavya yahi khema khotaṃnade vartamana hačňati iṃthuami mahi maharayaṣa padamulaṃmi viṃñadi-

以下に記すことを。すなわち，王国の問題を処理するよう命令を与えた時，王国の問題に日夜励み，そして警護は身命を賭して勤められるべきであると。Khema[21] や Khotan から［何か］知らせが届いたなら，大王たる朕の足下に報告書簡

（3）lekha prahadavya avi adehi toṃga vuktoaṣa hastaṃmi viṃñadi-lekha prahideṣi tade ahu maharaya ṣarvañadarthemi avi paruvarṣa uvadae supiyana paride suṭha atra tumahu upaśaṃgidavya huati ityartha tusya rajiye jaṃna nagaraṃmi

を送るべきである。また，そなたから Toṃga 官の Vukto の手に報告書簡が送られた。それによって大王たる朕はすべて聞き及んでいる。また，先年 Supi 人たちから非常な［危険(?)］がそちらそなたたちに［あり］，そなたたちは王国の人々をまちに

（4）asidetha ahuno supiye [sa]rvi gataṃti yatra purva asidae huaṃti tatra asitaṃti

---

21）Khema は，『後漢書』西域伝にみられる拘彌国にあたると考えられる。拘彌国の比定問題については先学によって諸説あり，長沢 1979 は Nina に比定するが，ここでは Khema と考える。これについては［Brough 1965：591－3］を参照されたい。

tumahu rajaṃmi niryoǵa huda avi khotaṃnade yoǵačhema ahuno lauṅǵaiṃci jaṃna lihidavya sudha nagara račhidavya avaśiṭhe raji jaṃna

住まわせたと。今，Supi 人はみな去った。彼らが以前に住んでいたところ，そこに彼らは住んでいる。そなたたちの地方に平穏が訪れた。また Khotan から平穏が［もたらされている］。今，Lauṅǵaiṃci の人々は書き留めるべきである。まちだけが守られるべきであり，

（5）oḍidavya na bhuya nagaraṃmi viheḍidavya avi ca paruvarṣaṃmi atra rayaka śuka masu saṃgalidaǵa huati ahuno śruyati eda masu masuvi ṣoṭhaṃga draṃgadhare sarve paričhinavitaṃti yahi eda anadi-lekha atra eśati praṭha cavala

王国の他の人々はそのままにされるべきである。再びまちに入れるべきでない。また，先年そちらに王国の śuka 葡萄酒が集められた。今，この葡萄酒がṢoṭhaṃga 官の葡萄酒集積所ではすべて失われたと聞いている。この命令書がそちらに届いたなら，ただちに

（6）paruvarṣi śuka masu imavarṣi masu sarva spara saṃgalidavya ekadeśaṃmi nisiṃcidavya avi yatha atra yatma parkutena kuv́ana tsaṃgina koyima[ḍh]ina sarvatra nagara-draṃgeṣu aṃna saṃgalida nihida sa aṃna asti hutu emeva ahuno

先年の śuka 葡萄酒，今年の葡萄酒がすべて完全に集められ，一所に注ぎ入れるべきである。またそちらで Yatma 官の Parkuta によって，Kuv́ana，Tsaṃgina，Koyimaḍhina[22] の穀物が，すべてのまちの集積所に，集積されたように，かの穀物は

（7）kuv́ana tsaṃgina ko[yi] ..... aṃna saṃgali[davo na]garaṃmi .... ti hutu avi yaṃ kala śighra karyena leharaǵana iśa rayadvaraṃmi ga[chiśa]ti yasa asti st.ra hačhati tade nikhalidavo rajade sama sama parikre dadavya

まさにある。今，Kuv́ana, Tsaṃgina, Koyi[maḍhina (?)] の穀物はまちに集められるべきである。また，Leharaǵa の迅速な働きによって，ここ王廷に派遣する場合，獣はその人に供出させるべきである。王国から等価の支払いが与えられるべきである。

（8）yena rajakaryani na iṃci śiśila bhaviṣyamti avi ghaṣa abhiṭhe nagaraṃmi saṃgalidaǵa hutu caṃdri kamaṃta rotaṃ curoṃa ratradivaṣa cavala iśa rayadvaraṃmi viṣajidavo avi śruyati raji jaṃna atra purana[ǵa nṛve]na paro-

王国の問題は，決して懈怠してはならない。また，飼料として相応しいものをまちに集めさせよ。Caṃdri, Kamaṃta[23], Rotaṃ, Curoṃa を，夜に日に，ここ王廷に送るべきである。

22）この部分と次行に記される kuv́ana，tsaṃgina，koyima[ḍh]ina について，Burrow は穀物（aṃna）に関わる形容詞句もしくは徴税された穀物に関連するものと考えている［L. Kh. D.: 84, 96］。ここでは Burrow の解釈を採用したが，これら 3 つの単語と aṃna の位置が，微妙に離れているのは不自然に思われる。これら 3 つの単語が，直前の parkutena と同じように，すべて loc. sg. の形をとっていると考えられるならば，それぞれを人名とみることも可能と思われる。これについてはさらに検討を加えるべきであろう。なお，kuv́ana については，山本 1998: 107 も参照されたい。

23）Caṃdri, kamaṃta については，T. Kh. D.: 50 No. 272 Note に従って，2 単語として訳しておく。

また，王国の人々はそちらで古い負債について，お互いに

(9) śparasya suṭha vih.ḍeṃdi ede samṛdhae jaṃna varidae hotu ma iṃci daraṃnaǵena jaṃnasya upeḍeṃti yaṃ kala khotaṃnade yoǵačňema bhaviṣyadi rajya sthiṣyadi taṃ kala śodheṣyaṃdi avi ca śruyadi yatha atra cojhbo soṃjakena

非常に悩んでいると聞いている。これらの富める人々は防ぐべきである。負債を持つ人々を悩ませることを。Khotan から平穏がもたらされたとき，王国が平穏なとき，その時に支払われるべきである。そしてまた，そちらでは Cojhbo 官 Soṃjaka に，

(10) aṭňoṕae ajhate jaṃna suṭha abomata kareṃdi taha na laṃcaǵa kareṃdi ekisya etaṣa raja picavidemi na ṣarvajaṃnasya rajakaryani kartavo idovadae na bhuya abomata kartavya yo maṃnuśa cojhbo soṃjakena abomata kariśati se maṃnuśa

有能な高貴な人々がまったく従順でないと聞き及んでいる。そうすることは正しくない。この地方を［彼］一人に委ねた。如何なる人々も王国の問題をなすべきでない。今よりは，かの男に再び不従順であってはならない。Cojhbo 官 Soṃjaka に不従順をなすその男は，

(11) iśa rayadvaraṃmi viṣajidavo iśemi nigraha labhiṣyati

ここ王廷に送るべきである。こちらで処罰が下されるだろう。

maṣe 10 1 divaṣe 10 3

11 月 13 日

[Rev.]

[cojhbo soṃ]jakaṣa dadavya

Cojhbo 官 Soṃjaka に与えるべし。

この皮革文書では，Cojhbo 官 Soṃjaka にはさまざまな職掌を課せられている。警護の問題，Khotan からの情報の収集及び報告，葡萄酒や穀物の徴収，伝令に際する経費の処理，人々の負債の問題など，実に幅広い責務を担っていたことをうかがわせる。ただしその弊害を嫌うためか，当地の人々が Soṃjaka に対して非協力的であったようで，その状態について改善を要求している点は興味深い。しかし，いずれにせよ，Cojhbo 官の職にあった Soṃjaka が多くの職責を担い，大きな権限を与えられていたことは間違いないと思われる。このように，Cojhbo 官の職にあった人物には，かなり大きな権限が与えられた場合がみられ，そのことは Cojhbo 官の社会的地位の高さをうかがわしめるのである。実際に，Cojhbo 官の社会的地位の高さを推定させる事例はこれ以外にも存在する。例えば，Cojhbo 官の一人として Kunala という人物がいる。Cojhbo 官としての Kunala は木簡 No. 022［Kh. I. I : 8］にもみられたが，この人物は矩形木簡 No. 025［Kh. I. I : 9］や矩形木簡 No. 305［Kh. I. I : 112］で Kala という称号が冠されて登場する Kunala と同一人物と考えられる。Kala は，矩形木簡 No. 622［Kh. I. II : 235］や矩形木簡 No. 634［Kh. I. II : 238］で，Kala が冠されている Puṃnabala が maharayaputra と称されていることから 'prince' を意味すると考えられている［L. Kh. D. : 82］。Kala 官が Cojhbo 官となる例としては，その他にも Rutraya（長方

形木簡 No. 112 [Kh. I. I : 43], 長方形木簡 No. 147 [Kh. I. I : 58－9], 長方形木簡 No. 169 [Kh. I. I : 67－8], 棒状木簡 No. 210 [Kh. I. I : 82－3]) があげられる。

しかしまた一方で, 書記の職掌を持つ官である Divira が Cojhbo となる例も存在する。例えば長方形木簡 No. 086 [Kh. I. I : 33], 矩形木簡 No. 127 [Kh. I. I : 49] で Cojhbo 官として登場するṄǵaca は, 楔形木簡 No. 090 [Kh. I. I : 34] で tivira ṅǵaca として, また矩形木簡 No. 93 N 3 xB [報告書 : II 166－9] で divira ṅǵaca として登場する。またṄǵaca は長方形木簡 No. 133 [Kh. I. I : 53] では,

[Obv.]

(1) bhaṭaraǵaṣa priyadarśanaṣa priyapitu cojhbo lṕipeyaṣa padayo ṅǵaca śirṣa poḍeti

主たる見目麗しき勝れた父たる Cojhbo 官 Lṕipeya さまの足下に。Ṅǵaca は叩頭して

(2) divyaśarira arogya saṃpreṣeti baho śadani (以下略)

御身の健やかならんことを数百度お贈りいたします。

とあり, また長方形木簡 No. 552 [Kh. I. II : 202] では,

[Rev.]

(1) bhaṭaraǵana priyadarśanana priyapitu ṣoṭhaṃgha lṕipeya divira sodaya

主たる見目麗しき勝れた父たるṢoṭhaṃgha 官 Lṕipeya さまと Divira 官 Sodaya さま,

(2) lṕimsuṣa ca padamulaṃmi ṅǵaca śirṣa poḍeṃti namakero kareti

Lṕimsu さまの足下に。Ṅǵaca は叩頭して,

(3) divyadhatu arogya saṃpreṣeṃti bahu aṣimatra (以下略)

ご健康の健やかならんことを無量にお贈りいたします。

とあって,「priyapitu 勝れた父たる」という表現がみられることから, Kh. I. III : 343 では Lṕipeya の息子であるとされている。しかし一方で矩形木簡 No. 569 [Kh. I. II : 209] では,

[Cov. –tablet. Rev.]

(1) lihidaǵa mahi ṣoṭhaṃgha luṭhu putra divira ṅǵacaṣa mahatvana anatena kuñita stri

[この書簡は] 私, Ṣoṭhaṃgha 官 Luṭhu の息子, Divira 官Ṅǵaca が書いた。mahatva たち Anatena, Kuñita の女

(2) tsiṃnaae śramaṃna budhilaṣa ceṣa ajeṣaṃnena śada varṣa pramana

Tsiṃnaae, 沙門 Budhila との願いにより。[有効期限は] 百度の雨期 [分である]。

とあり, ここでは明確に「Ṣoṭhaṃgha 官 Luṭhu の息子たる Divira 官Ṅǵaca」と記されている。この例からみれば, priyapitu という表現もまた敬意をあらわす言い回しであると考えられよう。しかし, いずれにせよ Divira 官Ṅǵaca が Luṭhu の息子であって Luṭhu が Cojhbo 官として登場する人物のうちの一人であるという事実は興味深いものといえよう。これらのことは Divira の職掌が重視されていたであろうこと, 父子ともに Cojhbo 官という官職についた事例もあったことを示すからである。Cojhbo 官として登場する人物が Divira という官職にあった例として, この他にも Budharačhi (矩形木簡 No. 330 [Kh. I.

I：120]，矩形木簡No. 348［Kh. I. I：126－7］，矩形木簡No. 415［Kh. I. I：148－9］）をあげることができる。

以上のように，カローシュティー文書にみられるCojhboたちには様々な職掌が負わされ，その任に当たっていた人物は社会的な地位も高かったと考えられよう。では，こういった社会的地位も高く，重要な職掌を担っていたと考えられるCojhboを，主簿に比定することは妥当であろうか。カローシュティー文書にみられるCojhbo官の担った職掌は，前節でみた主簿が司るとされる職掌を含んでいると思われるが，先に引用したカローシュティー文書にもみられたように，Cojhbo官の担った職掌や社会的地位は主簿のそれとは，やはり齟齬を生じているように思われる。

では，仮に主簿の音価がNiya Pkt.に借用されてCojhboと称されるようになったと考えた場合，その導入の時期は何時であったのだろうか。これに関してAtwoodの指摘は興味深い。Atwood 1991：176はカローシュティー木簡にみられる官職について，

> The chief official of the province was the great governor［Cojhbo］（§ 272），or before then, in the time of kings Pepiya and Aṃgoka, the elder（kitsaitsa）

とし，Cojhboという官職が鄯善王国の各地方における長官であったと理解する一方でKitsaitsaという官職がPepiyaとAṃgokaの時期において各地方の長官として存在したのだと理解するのである。彼によれば，Kitsaitsaという称号を持つ人物は3人であり，Mahiriの紀年を持つ文書にはわずか1例しかKitsaitsaは登場しないという［Atwood 1991：164］。また，彼はAtwood 1991：195－7 Appendix IIにおいて，Mahaṃta Cojhboという称号が冠せられる6人の人物の時期を紀年文書によって特定し，それらの人物の活動時期がMahiriからVaṣmanaの治世にあたることを述べている。このAtwoodの研究をふまえるならば，主簿がNiya Pkt.にCojhboという形で借用された時期はMahiri以前のある時期ということになろう。従来の研究成果をふまえるならば，それは鄯善王国の王の称号に「Jiṭuṃgha侍中」が導入された以後であるはずだから，侍中の導入以後，Cojhboという官職名が使用されたということになろう。とすれば，この考えはCojhbo＝主簿説を裏付ける根拠ともなり得る。しかし，Atwoodの指摘は不十分である。確かにmahaṃtaもしくはmahaを冠した称号を持つCojhbo官たちの年代はMahiriからVaṣmanaの時期にほぼ特定できる。しかし，mahaṃta-/maha-の冠せられたCojhbo官の一人であるSoṃjakaが記載されている紀年文書にAṃgoka 20年のもの（木簡No. 582［Kh. I. II：217－8］）があるし，それらの6人以外にも，Aṃgoka 6年の紀年文書（木簡No. 581［Kh. I. II：216－7］）にはCojhbo官Varpaが記載されているのである。その他にもMahiri以前の紀年文書のうち，7点の文書にCojhbo官が記載されている（本稿Appendix.1参照）。このことは，現存のカローシュティー文書では，侍中の称号がNiya Pkt.に導入される以前に，Cojhboという官職名がすでに使用されていたことを意味している。それだけでなく，CojhboとKitsaitsaが併出する例も存在するのであ

る[24]。Atwood は mahaṃta- / maha- Cojhbo の称号を持つ人物たちの活動時期が Mahiri 以後の治世にあたるというが，そもそも紀年を有する現存文書のうちの半数以上が Mahiri と Vaṣmana のものであることをも考え合わせるならば，地方を管掌する支配権を持つ官職が Kitsaitsa から Cojhbo へと移行したとすることには問題が残ると思われるのである。

以上，これまで述べてきたことから考えると，カローシュティー木簡に登場する Cojhbo の担っていた職掌と，主簿の担っていた職掌には若干の違いがみいだされ，その社会的地位についても隔たりがあるように思われる。また，その導入の時期についても齟齬が生じるのである。仮に，その職掌や社会的地位は考慮されずその音価だけがカローシュティー文書すなわち Niya Pkt. に導入されることになったと考えたとしても，ニヤ遺跡周辺から主として収集されているカローシュティー文書の年代と，主として楼蘭周辺から収集されている漢文文書の年代が重なっており，それぞれにCojhbo, 主簿という官職が登場しているのであるから，主簿は名称だけでなくその実際的な職掌も当地では認識されていたと考えるべきであろう。また導入の時期についても，侍中＝Jiṭuṃgha の称号が Niya Pkt. に導入された Aṃgoka の 17 年以後であるべきだろう。にもかかわらず，Cojhbo という官名は Aṃgoka 17 年以前からカローシュティー文書には現れているのである。とすれば，主簿の持つ音価だけがカローシュティー文書に導入され Cojhbo と音写されたと考えるのは困難と思われるのである[25]。

---

24) Kitsaitsa 官と Cojhbo 官の併出する文書は，例えば矩形木簡 No. 436 [Kh. I.II : 158]，矩形木簡 No. 437 [Kh. I. II : 159]，楔形木簡 No. 561 [Kh. I. II : 206]，矩形木簡 No. 571 [Kh. I. II : 210－1]，矩形木簡 No. 579 [Kh. I.II : 215]，矩形木簡 No. 581 [Kh. I. II : 216－7]，矩形木簡 No. 582 [Kh. I. II : 217－8]，楔形木簡 No. 671 [Kh. I. II : 253]（本文中に引用）などをあげることができる。また，Atwood は Kitsaitsa 官の出現する事例が Mahiri 以後極端になくなるかのようにいうが，上記の併出文書のうち No. 436 には Śamaṣena が，No. 561 には Yitaka が，No. 582 には Soṃjaka が Cojhbo 官として登場しており，彼らの Cojhbo 官としての時期を考えるとこれらは Mahiri の時期以後のものである可能性が高いのである。

25) ただし，すでに山本 1998: 27－8 でも指摘されているように，『後漢書』西域伝　于闐国条には，カローシュティー文書中に Khema として記載される拘彌国の王成国の属官として主簿が登場する。

順帝の永建六年，于闐王放前侍子を遣りて闕に詣りて貢獻せしむ。元嘉元年，長史趙評于闐に在りて癰を病み死す。評の子迎喪して，道を拘彌に經る。拘彌王成國于闐王建と素より隙有り，乃ち評の子に語りて云く，「于闐王胡醫をして毒藥を持ちて創中に著らしむ。故に死に致るのみ」と。評の子之を信じ，還りて塞に入り，以って敦煌太守馬達に告ぐ。明年，王敬を以って代えて長史と爲し，達は敬をして其事を隱覈せしむ。敬先に拘彌を過ぐ，成國復た説きて云く，「于闐國人我を以って王と爲さんと欲す，今此罪に因りて建を誅すべし，于闐必ず服さん」と。敬功名を立てんことを貪り，且く成國の説を受け，前みて于闐に到り，供具を設けて建に請いて，陰に之を圖る。或は敬の謀を以って建に告ぐも，建信ぜず，曰く「我は無罪なり，王長史何爲れぞ我を殺さんと欲す」と。旦日，建官屬数十人を從へ敬に詣る。坐定まり，建起ちて行酒す。敬左右を叱して之を執えんとすも，吏士並びに建を殺すの意無し，官屬悉く突走するを得。時に成國の主簿秦牧敬に隨いて會に在り，刀を持し出でて曰く，「大事已に定る，何爲れぞ復た疑わん」と。即ち前みて建を斬る。……

『後漢書』巻八十八　西域伝　于闐國條（中華書局本による）

これによって，当時拘彌國，即ちカローシュティー文書にいう Khema に主簿がいたらしいことは推察される。このことは精絶，且末などといった鄯善国の各地にも主簿がいた可能性を示唆し，当時の南道の状況を示すものとして興味深いものではある。しかしこの『後漢書』の記述が，Cojhbo＝主簿を支持するものでは決してないことには注意が必要であろう。

おわりに

以上述べてきたことをここでもう一度まとめておきたい。従来から，カローシュティー文書にあらわれるCojhboという官職名については，イラン系言語からの借用語であるという見方が存在した。近年においては，それに加え主簿という官職名が漢語からの音写であるという見方が提出されている。実際，楼蘭地域を中心とした地域から収集されている漢文文書には主簿という官職名を持つ人物たちが登場しており，それらの間に何らかの関連を想定することは可能かも知れない。しかし，カローシュティー文書の内容を検討すると，その見方には問題があると考えられる。カローシュティー文書においては，Cojhboたちは様々な職掌を負わされ，その任に当たっていた人物は社会的な地位も高かったと考えられる。彼らCojhboという官職にあるものが担っている役割や社会的地位は，主簿の担っていたそれとは齟齬がある。また導入の時期などから考えても，Cojhboと主簿を同一視することは困難と考えられる。従来からいわれているイラン系の言語から借用されたとする見方を否定するには，やはり問題が多いと思われるのである。

ニヤ遺跡を中心とした地域から収集されているカローシュティー文書と，主に楼蘭地域から収集されている漢文文書との関係は，これまではあまり深く追求されていない。その理由の一つには資料上の問題があると考えられるが，今後はカローシュティー文書と漢文文書を別々に考えるのではなく，相互の関係なども視野に入れて考える必要があると思われる。そういった作業を通して，この時期における東西交流の実態がより具体的な形で理解できるようになると考えられるのである。

附記　本稿脱稿後，冨谷至編著『流沙出土の文字資料——楼蘭・尼雅文書を中心に——』（京都大学学術出版会，2001年）が刊行された。少なからぬ示唆に富むが，すでに出稿していたため残念ながらその成果を本稿に反映させることができなかった。大方のご寛恕を乞う次第である。

Appendix. 1 Cojhbo 官の登場する紀年文書

紀 年	登場する Cojhbo 官	木簡 No.
Aṃgoka 6年	Varpa	581
Aṃgoka 9年	Lustu	579
Aṃgoka 17年	Kuṕiñeya	571
Aṃgoka 20年	Soṃjaka、Vanaṃtaṣa、Suryamitra	582
Aṃgoka 23年	Lustu	327
Aṃgoka 26年	Alṕaya、Daḍavala	709
Aṃgoka 31年	Jivaśama	506
Aṃgoka 32年	Kaṃciya	592
Mahiri 4年	Soṃjaka、Vanaṃtaṣa、Suryamitra	582
Mahiri 4年	Soṃjaka	584
Mahiri ?年	Soṃjaka	732
Mahiri 7年	Soṃjaka	415
Mahiri 7年	Soṃjaka	573
Mahiri 11年	Biṃmaṣena	570
Mahiri 11年	Soṃjaka、Biṃbhaṣena、Jayatrada	578
Mahiri 11年	Soṃjaka	568
Mahiri 11年	Soṃjaka	637
Mahiri 13年	Soṃjaka	569
Mahiri 17年	Taṃjaka、Kolṕisa、Cakvala	575
Mahiri 17年	Śamaṣena、Pǵoa	593
Mahiri 19年	Śamaṣena	436
Mahiri 20年	Śamaṣena	577
Mahiri 21年	Yitaka (?)、Vukto	322
Mahiri 21年	Yitaka、Vukto、Namarasma	576
Mahiri 22年	Soṃjaka	222
Vaṣmana 6年	Kranaya	767
Vaṣmana 8年	Larsu	343
Vaṣmana 9年	Larsu	345
Vaṣmana 9年	Iṃdrasena、Kirtiśaṁa、Takra、Mitrapala	318
Vaṣmana 10年	Larsu	401
Vaṣmana 10年	Naṃtipala	478

Appendix. 2 本文引用カローシュティー文書の注記

木簡 No. 671

valaǵa Skt. Pālaka m. 'a guarding, protecting' [L. Kh. I.: 119]

trina tre Gen. Pl. Skt. tri [L. Kh. I.: § 89]

saṃvatsari Loc. Sg. Skt. Saṃvatsara m. a full year, a year [L. Kh. I.: § 58]

pačavara (= pačevara) 'food, provisions', as is clear especially from 505 *tsuǵenaṃma satu milima 2 khi 10 4 1 maka khi 4 1, kavaśi 1 ; pačevara piṃḍa milima 3 chataǵa 1, tena tsuǵenaṃma giḍa*. . . . . Here clearly *pačevara* is the general term 'food' in opposition to the particular kinds of food enumerated, just as *chataǵa* (= *chādaka*) 'clothing' is in op-

position to the particular garment mentioned..... Etymology uncertain, but a connection may be suggested with the Sogd. *pš" βr* 'food, provisions' Original *paθya°-* = 'food for a journey', cf. Skt. *pātheya-* [L. Kh. D.: 102]

giṃnidavo Skt. gṛihita / √grah 'to size, take' Ger.

kitsaitsa Title. The *kitsaitsa* was of very high rank, often being mentioned along with *kālas* (581, 606, 640, etc.), also with *tasuca* (495, 648). The functions of the *kitsaitsa* were of a judical nature (e.g. 495, 581, 606, 719, 730). Connected possibly with Toch. B. *ktsaitsañe* 'age'. The meaning 'elder', i. e. member of a sort of council of elders, would be quite appropriate. [L. Kh. D.: 82]

dadavo Skt. √dā 'to give' Ger.

木簡 No. 028

mahanuava Skt. mahānubhāva mfn. 'of great might, mighty, high-minded, &c.' nuava Apparently short for *mahanuava* = *mahānubhāva* (royal title). Less likely an independent (non-Indian) title. [L. Kh. D.: 101, § 28]

maharaya Skt. mahārāja

lihati (= likhati) Skt. √likh 'to scratch, scrape, write, inscribe' pres, 3 ed, sg.

toṃga An official. He comes among the list of officials who are qualified as *ajhade* 'noble' or 'free' (436). His functions were closely connected with those of the *cojhbo*.... These functions seem to have been most closely connected with camels and horses, and the conveying of things from one part of the kingdom to another. [L. Kh. D.: 95]

matra (= mantra) 'speech, sacred text or speech, a prayer or song of praise'

deti Skt. √dā 'to give' pres, 3 ed, sg.

ṣaca 'namely' [L. Kh. D.: 128]

yahi 'when' [L. Kh. D.: 65 § 131]

kilamudra 'wedge-seal' i.e. wedge-shaped wood on tablet with the royal seal on. Cf. Stein, *Ruins of Ancient Khotan,* p. 368. [L. Kh. D.: 83]

eśati Skt. √aś 'to reach, come to, &c.' fut, 3 ed, sg

praṭha 'forthwith, at once' from Skt. pra√sthā. [L. Kh. D.: 107, § 91]

kala Title. It may mean 'prince' because *kala puṃñabala* is called *maharayaputra* 622, 634. About ten *kalas* are mentioned. Prof. Thomas has suggested that it is the same word as appears as *kara* in *kujula kara kadphises* on the coins of that monarch, while *guśura* = *kujula*. The identifications are exceedingly probable, although the phonetics are not easy to explain. On the other hand titles like these are liable to be borrowed from kingdom to kingdom, undergoing phonetic changes *en route*. [L. Kh. D.: 82]

kulola (= Skt. kulāla 'a wild cock, an owl'?) The term *kulola* applied to an individual

occurs only here and its meaning is unknown. [T. Kh. D.: 7 No. 28 Note]

cavala 'quickly' [L. Kh. D.: 89, § 90]

leharaǵa (= lekhahāra) Skt. lekhahāra or -hāraka m. 'a letter carrier, the bearer of a letter' [L. Kh. D.: § 110]

gamiṣati Skt. √gam 'to go, move, go away, set out, &c.' Future The ending *-iṣyati* (*-iśati*) is usually added to the present base, but we find *gamiśati* beside *gachiṣyati*. [L. Kh. D.: § 99]

hastami Skt. hasta m. 'the hand, to take into the hand, get possession of' loc. sg.

viṣajidavo Skt. vi√sṛj 'to send or pour forth' Ger. The two forms *viṣaj*-and *viṣarj*- are used indiscriminately [L. Kh. D.: 122]

木簡 No. 022

ṣoṭhaṃgha (=ṣoṭhaṃga) An official in the royal administration charged with keeping the accounts of taxation and royal property (camels, etc.), 'tax-collector'. Such in general seems to have been the nature of their functions to judge from the allusions which occur.... From this it is quite clear that the *ṣoṭhaṃghas* were engaged in collecting commodities, wine, etc., paid as tax: also that they were appointed by the local *cojhbo*, the letter being addressed to *cojhbo* Somjaka. The office was nearly related to that of *divira* 'scribe'. [L. Kh. D.: 127-8] Prof. Thomas suggests that this word may be Tibetan- *so* 'military guard' and tham 'chief'; cf. *Fest. Jac.*, p. 51. [Kh. I.III: 374] [Bailey 1949: 123-6]

ahuno (= adhunā) ind. 'at this time, now' [L. Kh. D.: 40]

dutiyae The form is always used in *dutiyae* =**dūtyayā* in the phrase *dutiyae gam*- 'to go as an envoy' [L. Kh. D.: 98, § 67]

gaṃdavo (= gamdavya) Skt. √gam 'to go' Ger. [L. Kh. D.: 87, § 46]

arivaǵa Probably means 'guide'. The *arivaǵa* is frequently mentioned as conducting envoys to Khotan.... Etymology uncertain. Prof. Thomas suggests Skt. *arpaka*-, i.e. through **aripaka*- with svarabhakti. [L. Kh. D.: 76-7]

sveyam eva (= svayam eva)

uṭa Skt. uṣṭra 'a camel'

ma iṃci *iṃci* in the phrase *na iṃci* 'not at all' (also *ma iṃci*) is out of *kiṃci*. The omission of the *k* is due to its being attached enclitically to *na* (*ma*). ... [L. Kh. D.: § 84]

vithana 'keeping back' vithida: (*vithiṣyati*, causative *vithavideṣi*, etc., verbal noun *vithana*). =Skt. vi√ṣṭhā 'to keep back' It is remarkable that the dental *th* always appears. It must have been reintroduced from the simple verb *thiyati*. The meaning is always active in the sense of 'keep away from, hold back from', not only in causative *vithav*-, but also regularly in the simple verb *vithi*-.... [L. Kh. D.: 120-1]

kartavo　Skt. √kṛ　'to do, make, perform, &c.'　Ger.

yatha　*yatha* with the indicative is regularly used in introducing quoted speech, the text of a complaint, etc.... *yatha* may be also used meaning 'as', in which case it usually takes the optative... [L. Kh. D.: 113, § 130]

purviǵa (= purvika)　Skt. pūrvaka　mfn. 'earlier, former, previous, prior, first'

dutana　Skt. dūta　m. 'a messenger, envoy, ambassador, negotiator'

saṃmana　Skt. sammāna　m. 'honor, respect, homege'

ciṃdidaǵa　ciṃd: = cint-　It is used in the sense of 'reckoning' or 'assessing' the amount of tax. [L. Kh. D.: 89, § 46]

木簡 No. 564

viṃñaveti　'to make known, declare, report'　Skt. vi√jñā　'to distinguish, know, understand ' Caus.

unidaǵa (also *uneyaǵa, unidi* (Fem.)). The forms are used indiscriminately, compare 538 *stri ramaśriae unidi giḍae huati* with 542 *sā kuḍi ramaśriae nama uneyaǵa giḍae.* ='adopted (child)'. The custom was very prevalent, since numerous documents refer to it. A payment was made by the adopters to the parents which was called *kuṭhačhira.* ... [L. Kh. D.: 79 – 80]

vikrida (=vikrinita)　'sold'　Skt. vi√kṛṛ　'to buy and sell, sell'　The past participle and its derivatives are as a rule formed from the present with the help of the vowel *i.* But a great number of original forms are preserved. Often both forms occur... [L. Kh. D.: 120, § 107]

ari　=*ārya* (?) *ārya* certainly becomes *aya* in one place (see above), but there is a specifically monkish term. *ari* does not seem to be associated with any particular function, like many of the titles, so that a general meaning something like 'sir', which *ārya* might easily have, is the most likely. On the other hand the term is not applied to very many people. [L. Kh. D.: 76]

vaṃti　=*upāṃte* 'in the presence of, near, with'. Khotanese *bendi.* Illustrations of its use are 546 *ogu bhimaṣenaṣa vaṃti garahiṣyama* 'We will make a complaint before the *ogu* Bhimaṣena' & c. [L. Kh. D.: 118]

anada　Seems to mean 'carefully, well, properly'. It occurs regularly in certain stock phrases, e.g. 1, etc.... It is perhaps the same word as Saka *ānata* 'kept preserved' (in the Saka version of the *suvarṇaprabhāsa-sūtra* [L. Kh. D.: 73 – 4]

pruchidavo Skt. √prach　'to ask, question, interrogate, ask after, to seek, &c.'　After *p* we get *ru* in *pruch-* (*proch-*), though also *pricha, pariprichati.* Ger. [L. Kh. D.: 108, § 5]

yadi　ind. (in Veda also *yadī*, sometimes *yadi cit, yadi ha vai*, & c.)　'if, in case that'　With Optative: *yadi aṃñatha siyati* 'If it is otherwise' .... With Future: 165 *yati tade purima*

pācima viṣajiṣyatu paṃthaṃmi paraṣa bhaviṣyati, tuo ... vyoṣiśaṣi 'If you dispatch it before or after then and it is stolen on the way, you will pay' [L. Kh. D.: 113, § 129]

bhudartha Skt. bhūtārtha m. 'anything that has really happened or really exists, real fact'

hačňati Is used both for *siyati* and *bhaviṣyati*, cf. § § 4, 99, 100. The optative sense is the more usual. The word = Pkt. *acchati*. The *h*- no doubt is from *huda, hodi, hotu*, etc. [L. Kh. D.: 133, § § 42, 99]

aṃnyeṣa Skt. ajñeya mfn. 'unkowable, unifit to be known'

木簡 No. 272

janaṃda bhavidavya Skt.√jñā (=jānan), 'to know' Ger. Skt.√bhū, 'to become' .... The active participles only used in certain stereotyped phrases and in words that have become adjectives.... *janaṃda*, frequently in the phrase *janaṃda bhavidavo* 'you must know' [L. Kh. D.: 92, § 101]

anati Skt. ā√jñā 'to order, command' ājñapti f. 'command'

didemi Skt. √dā 'to give' pres., 1 st, sg.

rajakicaṣa Skt. rajakṛtya n. 'state affairs' gen. sg. [L. Kh. D.: § 5]

kridena Skt. √kṛ 'to do, make' kṛta mfn. 'done, made' inst. sg.

taha Skt. tathā ind. 'in that manner, so, thus'

rajakaryaṃmi Skt. rājakārya n. 'a king's duty or business, state affairs' loc. sg.

ratradivaṣa Skt. rātra diva n. 'night and day' gen. sg.

osuka Skt. autsukya n. 'anxiety, desire, longing for, regret, zeal &c.'

avajidavya Skt. ava√ji 'to spoil, win, to ward off, to conquer' Ger.

avi Skt. api 'and, also, moreover, besides, assuredly, surely'

sṕasa (=sṕaṣa) 'watch, watching, guard'. Whence *sṕaṣavaṃna* 'guard, watchman'. Iranian **spāsa* and **spāsapāna* (cf. Sogd. *sp*'s 'service', N. Pers. *sipās* 'thanks', both of which have lost the original meaning). [L. Kh. D.: 132]

jivita paricaǵena Skt. √jīv 'to live, be or remain alive' jīvita mfn. 'lived through (a period of time)' Skt. paricaya (pari√ci)

račňidavya Skt. √rakṣ 'to guard, watch, take care of, protect, save' Ger.

vartamana Is used as a substantive meaning 'what is happening, events, news' in the phrase.. .. Pres. par. [L. Kh. D.: 119, § 101]

iṃthuami (= iṃthuaṃmi) Skt. ittham ind. 'thus, in this manner' [L. Kh. D.: § 91]

padamulaṃmi Skt. pada n. 'a step, pace, stride, &c.' Skt. mūla n. 'firmly fixed, a root, &c.' loc. sg.

viṃñadi-lekha Skt. vi√jñā 'to distinguish, know, understand' Caus. 'to make known, declare, report'

prahadavya (= prahatavo) Skt. pra√dhā 'to place or set before, offer, to send out' =*pradh-*

ātavya 'to be sent' from *prahita* 'sent' [L. Kh. D.: 108, § 116]

adehi means 'from you', as contrasted with *imade* 'from us'. [Kh. I.III : 330] 'from there' [L. Kh. D.: 73, § 91]

prahideṣi past, 2 nd, sg. prahita: 'sent' might be either *prahita* from *prahiṇoti* or *prahita* from *pradadhāti*. The gerundive *prahatavo* point the latter, the meaning to the former. The two verbs have probably become confused. [L. Kh. D.: 108]

ṣarvañadarthemi (= sarva-jñātārtha) The bahuvrihi *ñadartha* = *jñātārtha* is treated like a participle and we get *ñadarthemi* 'I have learned'. past, 1 st, sg. [L. Kh. D.: § 108]

paruvarṣa (= parudvarṣa) 'last year' [L. Kh. D.: 104]

uvadae (= upādaya) 'starting from' Skt. upādāya ind. p. 'taking with, together with, including, inclusive' [L. Kh. D.: § 102]

paride prep. 'from' *paride*, which is very common always, takes the genitive and not the ablative. [L. Kh. D.: § 92]

suṭha =*suṣṭhu* 'very'. The form must correspond to something like **suṣṭham*. [L. Kh. D.: 131]

upaśaṃgidavya (=upaśaṃgidavo < upaśaṃghidavo) Skt. upa√śaṅk 'to suspect, suppose, think' [L. Kh. D.: § 46]

ityartha 'reported speech' As stated above (§ 130) people's words are usually quoted introduced by *yatha*. In addition *ityartha* may be appended to quoted speech, or it may be given without any special indication at all. [L. Kh. D.: § 134]

jaṃna Skt. jana m. 'creature, living being, man, person, race'

asidetha Skt. √as 'to be, live, exist, be present, to take place, dwell, & c' past, 2 nd. pl.

gataṃti Skt. √gam 'to go, move, go away, & c.' past, 3 rd, pl. gata: As in the modern Indo-Aryan languages and in Persian, a new past tense is formed by attaching the personal endings to the past participle passive..... The 3 rd singular has no termination, the simple stem being used both for the masculine and the feminine [L. Kh. D.: § 105]

niryoǵa cf. No. 578 (niryiga) 'relaxation' [L. Kh. D.: 101, § 42]

huda Skt. √bhū 'to become, arise, &c' past, 3 rd, sg.

yoǵačĥema Skt. yogakṣema m. 'the security or secure possession of what has been acquired, the keeping safe of property, welfare, prosperity, &c.'

lauṅǵaiṃci Quite obscure. May or may not be a proper name. native suffixes *-eṃci, -eci, -iṃci, -ici, -ci* is used in making adjectives from place-names [L. Kh.D.: 114, § 77]

sudha = 'only'. The etymology is not clear [L. Kh. D.: 131, § 91]

avaśiṭhe Skt. ava√śiṣ 'to be left as a remnant, remain'

oḍidavya oḍeti 'let go, send away, allow'.... The etymology is not clear. It may be connected with Pali *oḍḍeti* 'throw away, reject' and *oḍḍeti* meaning 'to set or lay a snare'

(*pāsa*). Ger. [L. Kh. D.: 81, § 99]

bhuya 'again' also *bhui, buo* 377, and *bhiyo* = Pali *bhiyyo* 579. [L. Kh. D.: § 91]

viheḍidavya Skt. vi√heṭh 'to hurt, injur' viheḍeti = *viheṭhayati* 'trouble, molest, harass' Ger. [L. Kh. D.: 122]

paruvarṣaṃmi (= parudvarṣa) 'last year' loc. sg. [L. Kh. D.: 104]

śuka Epithet of *masu* 'wine' or 'grapes' (see s.v.). Not=*śulka* 'tax' as Lüders ('Zur Geschichte des ostasiatischen Tierkreises', *SPAW*. (1933), p. 6) takes it, because it is used exclusively of *masu* and never of other commodities, while usual word for 'tax'is *palṕi*. [L. Kh. D.: 125-6]

masu 'wine' Lüders, 'Zur Geschichte des ostasiatischen Tierkreises', *SPAW*. (1933), p. 3 [L. Kh. D.: 110-1]

saṃgalidaǵa Skt. saṃ√kal 'to heap together, collect' ppt.

śruyati Skt. √śru 'to hear,' The passive is quite rare. It is used commonly in *śruyati* 'it is heard' and *vucati* 'it is said' pass. [L. Kh. D.: § 94]

draṃgadhare cf. [Stein 1907: 367] draṃga: The question is put there as to whether the meaning is not 'office, department' in general rather than 'Frontier-watch station' as Stein suggested, or even 'toll-house', ... Similarly *draṃgadhare* (*tr°*, etc.) means people employed in the government administration. [L. Kh. D.: 98-9]

pariĉhina Skt. parikṣīṇa mfn. 'vanished, disappeared, wasted, &c.' *pariĉhinavitaṃti* 'they caused to perish, used up' 272 is formed from the past participle passive. Causative [L. Kh. D.: § 104]

imavarṣi (= ima-varsa) 'this year's' [L. Kh. D.: § 82]

sṕara (also *sṕura*) ='completely' More often in the phrase *sarva sṕara* (*sṕura*) 'all complete' [L. Kh. D.: 132]

nisiṃcidavya Skt. ni√sic 'to sprinkle down, pour upon or into, infuse, instill, irrigate' Ger.

kuv́ana Epithet of corn (*aṃna*), collected as tax. There are three technical terms applied in this sense: *kuv́ana, koyimaṃḍhina, tsaṃghina* (e.g. 272), but their precise signification is not clear. [L. Kh. D.: 84]

nihida Skt. ni√han ni-hita mfn. 'laid, placed, deposited, fixed or kept in' Caus.

hutu (= hotu) Practically no imperative forms occur. Outside *hotu* there is only *davyatu*, 3 rd passive, 399 *ma iṃci vṛtaǵa uṭa davyatu* 'Let not an old camel be given'. *hotu* (*hutu*) is common and is used for both sg. and pl., ... [L. Kh. D.: § 98]

śighra karyena Skt. śīghra mfn. 'quick, speedy, swift, rapid' Skt. kārya n. 'work or business to be done, duty.'

gachiśati (= gachiṣyāti) Future. *seṭ* forms are practically universal.... The *a* of *iṣyati* is sometimes marked long, so that possibly it had been lengthened on the analogy of the opta-

tive [L. Kh. D.: § 99]

nikhalidavo Skt. niṣ√kal 'to drive out or away' Ger.

caṃdrikamaṃta In 714 *cāṃdri kamaṃta* occurs again. Since the two words do not occur separately we cannot be sure whether there are two different commodities which happen to be mentioned together on the two occasions where they occur, or whether it is a compound expression. [T. Kh. D.: 50 No. 272 Note]

rotaṃ (=rotaṃna) Some commodity which had to be sent as tax, 295, 385, etc. *curoṁa*, another commodity equally obscure, is often mentioned beside it, ... There is an Iranian *raudana which means 'madder' (N. Pers. *rōyan, rōyang*, North Balōčī *rōdin*). It might possibly be that, but unless the meaning in the Kharoṣṭhi documents can be fixed, it naturally remains uncertain. [L. Kh. D.: 114]

curoṁa (*croṁa, ciroṁa*). Some kind of agricultural commodity, sent as tax (*palṕi*). From 264 *curoṁa paśu* 2 '*curoṁa* sheep 2' it would seem to be something that is got from sheep or goats (cheese ?). [L. Kh. D.: 90]

puranǵa Skt. purāna mfn. 'belonging to ancient or olden times, ancient, old'

nṛvena (= Skt. *ṛna*?) n. 'anything wanted or missed, anything due, obligation, duty, debt' inst, sg.

parosṕarasya Adjectives declined pronominally are.. .. *parosṕarasya, parosṕarena* 'one another' [L. Kh. D.: § § 49, 88]

vih.ḑemdi (= viheḑeti) Skt. vi√heṭh 'to hurt, injury, (worry)' = *viheṭhayati* 'trouble, molest, harass' past, 3 ed, pl. [L. Kh. D.: 122]

samṛdhae Skt. samṛddha mfn. 'rich, wealthy' [L. Kh. D.: § 110]

varidae Skt. √vṛi 'to ward off, check, keep back, prevent, hinder, restrain' [L. Kh. D.: § 110]

daraṃnaǵa Skt. dhāraṇaka mfn 'holding, containing' m. 'a debtor'

upeḑeṃti Skt. upa√i 'to go or come or step near, approach, betake, one's self to, arrive at, &c'

bhaviṣyadi Skt. √bhū Future ... Beside *-ami* of the 1 st singular there are a few forms in *-a*: They are not=Śaur. *-isṣam* but mistakes; cf. *bhaviṣya* 109 = *bhaviṣyati*. [L. Kh. D.: § 99]

sthiṣyadi Skt. √sthā 'to stand, stand upon, keep on , &c' fut.

śodheṣyaṃdi (=śodhitavo) 'pays off' of *śudha* śudha 'cleared off, clearing off' (of payments, debts, obligations) [L. Kh. D.: 126]

aṭhóvae (=aṭhovaǵa) 'ready, fit (for work), capable, available (for use)' The meaning was first pointed out by Prof. Thomas in *Acta Or.* xii. [L. Kh. D.: 73, § § 37, 49]

ajhate Probably = Av. *āzāta*, N. Pers. *āzād* 'noble' or 'free', cf. *BSOS*. vii, 509. [L. Kh. D.: 73]

abomata (=abhyavamata) =used with *kṛ* in the sense of 'disobey, disrespect', ... [L. Kh.

D.: 75, § § 41, 107]

laṃcagá Seems to mean 'rightly, properly, adequately' .... When used in connection with paying taxes, etc. it means 'the full amount due' [L. Kh. D.: 114]

picavidemi (=picav–) The same difficulties are against identifying it with *pratyarp–* as in the case of *picara–, pratyarha.* The meaning, too, does not correspond exactly. Skt. *pratyarp* always means 'give back, restore' not simply 'hand over to', which is *arpayati.* [L. Kh. D.: 105, § 36]

idovadae 'from now' Skt. i–dā 'now, at this moment' (=ito uvadae [報告書II: 164–5, 173])

nigraha 'punishment' [L. Kh. D.: 101]

labhiṣyati Skt. √labh 'to get, seize, catch' fut. 3 ed. sg.

木簡 No. 133

bhaṭaraǵaṣa Skt. bhartṛ m. 'a bearer, chief, lord, master'. Cases where *r* is assimilated.... *bhaṭaraǵa* 'master' [L. Kh.D.: § 37]

priyadarśanaṣa Skt. priya mfn. 'be loved, dear to, liked, favorite, wonted, own, &c.' Skt. darśa mfn. 'looking at, viewing'

priyapitu Skt. pitṛ 'father'

padayo Their knowledge of Sanskrit has induced the writers to put in a dual occasionally: *padebhyaṃ* (Dat.) 288 with the *e* of the plural, *pateyo* 722, *padayo* 34, 97, 133, *pādeyo* 498 = *pādayoḥ* [L. Kh. D.: § 66]

śirṣa Skt. śīrṣa n. 'the head, skull, the upper part, tip, top, &c.'

poḍeti Pāli. poṭheti 'to beat, strike'

divyaśarira Skt. divya–śarīra n. 'the body, bodily frame, solid parts of the body'

arogya Skt. a–roga mfn. 'free from disease, healthy, well'

saṃpreṣeti Skt. sam–pra√ish 'to send forth, throw, fling' Caus. *–shayati* 'to send a message to (gen.)'

baho Skt. bahu mfn. 'much, many, frequent, abundant, numerous, &c.' Declension of, [L. Kh. D.: 109, § 71]

śadani (=śatāni) Skt. śata [L. Kh. D.: § 61]

木簡 No. 552

namakero Skt. namaskārya mfn. 'to be worshipped or adored, venerable' Sing. Nom. Acc. .... Further forms which frequently have *–o* are *aprameyo* and *aprameǵo, namakero* = *namaskārya*, .. [L. Kh. D.: § 53]

kareti Skt. √kṛ 'to do'

divyadhatu Skt. divya–dhātu m. 'a constituent element or essential ingredient of the body'

aṣimatra Skt. adhimantha m. 'great irritation of the eyes'

木簡 No. 569

divira (=tivira) 'scribe, writer'. Iranian loan-word. M. Pers. *dipīr*, N. Pers. *dabīr*. The Iranian forms show a long *ī*, so that we may have **divīra*. On the other hand, the word is borrowed into Sanskrit with a short *i*, *divira*. [L. Kh. D.: 98]

mahatva .... *tm* becomes *tv* in *mahatva* (an official title), if that is not = *mahattva*. *mahatva* 'magistrate'= *mahātmā*, Gen. *mahatvaṣa*. [L. Kh. D.: § § 44, 72]

ajeṣaṃnena =*adhyeṣhanayā* 'at the request of' [L. Kh. D.: § § 41, 67]

varṣa Skt. varṣā 'the rains, rainy season, monsoon'

pramana Skt. pramāṇa n. 'measure, scale, standard, mesure of any kind (as size, extent, weight, multitude, quantity, duration)'

参考文献

Kh. I. I : Boyer, A. M., Rapson, E. J., and Senart, E. (trans. & ed.), *Kharoṣṭhī Inscriptions discovered by Sir Aurel Stein in Chinese Turkestan*, Part I. Oxford, 1920.

Kh. I. II : Boyer, A. M., Rapson, E. J., and Senart, E. (trans. & ed.), *Kharoṣṭhī Inscriptions discovered by Sir Aurel Stein in Chinese Turkestan*, Part II. Oxford, 1927.

Kh. I. III : Rapson, E. J., and Noble, P. S. (trans. & ed.), *Kharoṣṭhī Inscriptions discovered by Sir Aurel Stein in Chinese Turkestan*, Part III. Oxford, 1929.

L. Kh. D.: Burrow, T., *The Language of the Kharoṣṭhi Documents from Chinese Turkestan*. Cambridge, 1937.

T. Kh. D.: Burrow, T., *A Translation of the Kharoṣṭhi Documents from Chinese Turkestan*. London, 1940.

報告書 I ：日中共同ニヤ遺跡学術調査隊『日中共同尼雅遺跡学術調査報告書　第 1 巻』 法蔵館, 1996 年.

報告書 II ：日中共同ニヤ遺跡学術調査隊『日中共同尼雅遺跡学術調査報告書　第 2 巻』 中村印刷, 1999 年.

楼蘭 I II III ：『楼蘭漢文簡紙文書集成』 天地出版社, 1999 年.

Chavannes, E. (1913) *Les documents chinois, decouberts par Aurel Stein dans les sables du Turkestan Oriental*. Oxford.

Conrady, A. (1920) *Die Chinesischen Handschriften und Sonstigen Kleinfunde Sven Hedins in Lou-Lan*. Stockholm.

Atwood, Ch. (1991) Life in Third-fourth Century Cadh'ota: A Survey of information gathered from north of Minfeng (Niya). *CAJ* 35.

Bailey, H. W. (1949) Irano-Indica II. *BSOAS* 13 (1).

Brough, J. (1965) Comments on Third-century Shan-shan and the History of Buddhism.

BSOAS 28 (3).

Burrow, T. (1937) Further Kharoṣṭhi Documents from Niya. *BSOS* 9 (1).

Henning, W. B. (1936) Neue Materialien zur Geschichte des Manichaismus. *ZDMG* 90.

Konow, S. (1935) Ein neuer Saka-Dialekt. *SPAW*.

Konow, S. (1937) Kabul Museum Stone Inscription of the Year 83. *Acta Orientalia* 16 (3).

Konow, S. (1947) The oldest dialect of Khotanese Saka. *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap* 14.

Mukherjee, B. N. (1996) *India in Early Central Asia*. New Delhi.

Stein, M. A. (1907) *Ancient Khotan*. Oxford.

Thomas, F. W. (1934) Some Notes on the Kharoṣṭhī Documents from Chinese Turkestan. *Acta Orientalia* 13 (1).

Thomas, F. W. (1944) The Early Population of Lou-lan-shan-shan. *JGIS* 11 (2).

Thomas, F. W. (1951) *Tibetan Literary Texts and Documents Concerning chinese Turkestan, part II: Documents*. London.

Литвинский, Б. А. (1992) Восточный Туркестан в древности и раннем средневековье. Москва.

Brough, J. (1966) ジョーン・ブラフ（田村智淳） 西域出土のインド語系文書——特に鄯善および初期漢訳仏典に関連して—— 『東方学』32.

伊藤敏雄 (1999)『鄯善国及び楼蘭屯戍と周辺諸地域との関係に関する研究』 1997－8年度科研費報告書.

榮 新江 (1991) 所謂 Tumshuqese 文書中的 gyazdi- 『内陸アジア言語の研究』 7.

榎 一雄 (1965) 鄯善の都城の位置とその移動について（1）『オリエント』 8 (1).

榎 一雄 (1967) 法顕の通過した鄯善国について 『東方学』34.

榎 一雄 (1971) 中央アジア・オアシス都市国家の性格 『岩波講座世界歴史 6 古代 6』岩波書店.

厳 耕望 (1963)『中国地方行政制度史』 上編（3）台北 中央研究院歴史語言研究所.

小山 満 (1980) 楼蘭主国胡那羨について 『創価大学 創立 10 周年記念論文集』.

長沢和俊 (1977) 再びカロシュティー文書の年代について 『早稲田大学文学研究科研究紀要』22.

長沢和俊 (1979) 拘彌国考 『史観』100.

長沢和俊 (1996)『楼蘭王国史の研究』 雄山閣出版.

高田時雄 (1988) コータン文書中の漢語語彙 『漢語史の諸問題』京都大学人文科学研究所.

蓮池利隆・市川良文 (1998) 龍谷大学図書館蔵のカローシュティー木簡について 『東洋史苑』50・51.

蓮池利隆 (1999) カローシュティー文字資料と遺構群の関係 『報告書Ⅱ』.

藤枝 晃 (1961) 吐蕃支配期の敦煌 『東方学報』(京都) 31.

孟 凡人 (1995)『楼蘭鄯善簡牘年代学研究』 新疆人民出版社.

山口瑞鳳 (1980) 吐蕃支配時代 『講座敦煌 2 敦煌の歴史』 大東出版社.

山本光朗 (1996) カロシュティー文書 No. 571 について 『北海道教育大学紀要 人文科学編』47

(1).
山本光朗 (1997) カロシュティー文書 No. 580 について 『北海道教育大学紀要 人文科学編』48 (1).
山本光朗 (1998) カロシュティー文書に見える漢人について 『西南アジア研究』48.
山本光朗 (1999) カロシュティー文書 No. 582 について 『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』50 (1).
楊　銘 (1997) 『吐蕃統治敦煌研究』新文豊出版公司.
林　梅村 (1985) 『楼蘭尼雅出土文書』 文物出版社.
林　梅村 (1988) 『沙海古巻』 文物出版社.
林　梅村 (1999) 新疆文物考古研究所所蔵カローシュティー文書 『報告書Ⅱ』.

(龍谷大学非常勤)